

ゴシック古典様式カテドラルの成立とその背景： Chartres, Reims, Amiens を中心として（中）

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2344382>

出版情報：史淵. 91, pp.75-99, 1963-07-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ゴテイツク古典様式カテドラルの成立とその背景

—Chartres, Reims, Amiens を中心として— (中)

森

洋

三、司教座聖堂参事会 (Capitulum cathedrale, Le Chapitre cathédrale)

「もしも我々が司教座聖堂参事会によつて果たされた、第一線の役割りを無視するならば、カテドラルの建設は決して理解され得ないであろう。……司教はかがやき、且つ場面から消えて行く星である。一方カテドラルの工事は、世代から世代へと受つがれて行く。これは誰のおかげであろうか。誰がカテドラルを見守るのであるか。これこそ司教座聖堂参事会である。」⁽¹⁾

Gimpel は、カテドラル建設に関して絶えず強調される大司教や司教達の功績以上に、少くともその一貫した工事遂行の事実の蔭に働く一貫した意志の担い手を、右のような言葉で司教座聖堂参事会に求めようとした。これは、従来司教の栄光のかげにかくれて見落されがちであつたこの存在の名誉恢復の試みとも云える。我々の目から見ても、半世紀以上に行たる工事の全体に、一司教の意志のみが貫く事は不可能に思えるし、又工事遂行上の繁雑を極める諸事務を、司教が直接につかさどる事はあり得ないから、何らかの形で、立案、設計、現場等を直接監督していた一団の存在を前提せねばならない。その際には、この司教座聖堂参事会は、差当り最も適応性をもつものと考え得るであろう。従つて本章では、先ず

この存在の性格構成の解明に焦点をしばつて、上記の如き Gmpei が下した司教座聖堂参事会の役割りの推定の当否を検討する事を始めたいと思ふ。⁽⁵⁾

Meiz の司教 Chrodegang (742—766) は、Aix-la-Chapelle の公会議 (817) における一般的な *regula* を与えられた *canonici* (*chanoines*) の集団 *capitulum* (*chapitre*) は、その起源において多岐であると同時に、その後の発展過程についても、特に十一世紀のいわゆる教会改革との関聯において、極めて複雑な様相を呈している。従つて此処では、この集団が、少くとも上記諸規範が作製された時期から教会改革にいたる時期において、カテドラルにおける典礼執行の継続維持を主目的としていた事、更に——この点がこの存在の性格の把握をいちじるしく困難にするのであるが——修道的目的をも同時にもつて、原則的にはカテドラルに附属している *clausura* (*cloître*) 内の共住生活を営んでいた事、最後にこの共住生活を維持するために、本来は *episcopatus* に属していた教会財産の一部が、*mensa canonica*, *canonica* 又は *praebenda* の名の下に賦与されていた事を記すに⁽⁶⁾、以て Reims を中心として、その構成・機能等につき、具体的な考察を行いたい。

この場合に、我々に先ず出発点を提供してくれるのは、Reims 大司教 Ebo の *Indiculum* (*avant 833?*) である。⁽⁶⁾ この史料は、先へのべた Aix-la-Chapelle の *regula* から、時間的にほとんど入だつてゐるから、この *regula* の原則の Reims における具体化の試みを示すものと前提する事が出来るであらう。この *Indiculum* は「Reims 教会ノ職務ニシテ」(De Ministeris Remensium (*sic*) *ecclesiae*) の内容を、それぞれ職務を分担する *praepositus*, *archidiaconus*, *chorepiscopus*, *episcopus* の各役職ごとに記述してゐる。

「*Praepositus* ハ〔教会ノ〕内外ヲトワズ *cura* ヲ担当セシメバナラナイ。外的ニハ〔教会ニ属スル〕諸事物ト従属民 (*familia*) ヲ保護シ、且ソレヲ神ニシタガツテ、熱心ニ、敬虔ニ、好意ヲモツテ管理スベキデアル。シカシテソレヲ

ハ、スベテノ給養ノ努力、農地・葡萄園・森林及ビ *hortus* ニオケル労働ノ、スベテノ有利ナ方法、各種購入ニ対スル事前ノ管理ニ存スル。更ニ建築ノ質或ハ量ニツイテノ必要〔モノノ職務デアル〕。又彼ノ内的ナ配慮ハ、明カニ兄弟タチ(司教座聖堂參事會員)ニタイスル共有〔物〕ノ配分 (*dispensatio fratrum publica*) デアラネバナラス。食ウモノニツキ、飲ムモノニツキ、或ハ神の敬虔ノ司サドルスベテノ身体ノ助ケニオイテ、或ハソノ働キノ熱意ヲ通ジテ、或ハ信徒ノ奉獻ニツイテ、更ニ又共通ノ管理〔ニ屬スベキ〕財産ヘノ贈与ニツイテ、〔コレラハ〕誠意ヲモツテ処理サルベキデアアル。更ニ病時又ハ健康時ニオケル、〔兄弟タチノ〕多岐ニワタル個々ノ必要事ニ対スル他ノ不可欠ナ配分ガ、同様ノ重要度ヲモツテ彼ニ屬スル。更ニコレラニ続イテ、兄弟タチノ身体並ビニ精神ニゾクスルスベテノ配慮ガ絶エズ行ワレナケレバナラス。第一ニ身体的〔配慮〕トハ、*clausura* ニオケル〔ソレモ〕、食堂 (*refectorium*) ニオイテモ、寢処 (*dormitorium*) ニオイテモ、貯蔵庫 (*cellarium*) ニオイテモ、調理場 (*coquina*) ニオイテモ、或ハ各個ノ住居ノ必要品ヤ、ハタ又スベテノ小器具ニモ、〔彼ノ配慮ガ行ワレルベキデアアル。〕精神的〔ニ〕、真ノ宗教ノ僕 (*minister*) ハ、昼夜ヲ問ワズ、宗務日課ノ時間ニ分ツテ (*canonicis partibus in horis*)、聖務 (*sancta conversatio*) ヲ行ワ〔シメ〕ナケレバナラナイ。輕イアママチニヨツテ動かサレタト認メラレル習俗ニ対スル懲罰ヲ〔行ウコト。即チ〕秘密ノ場処ト時間ニオケルムナシイ会話ヲ、ソノ全キ嚴格サニオイテ排除スルコト。 *capitulum* ニオイテ、全員ニヨリ公ケニ認メラレタスベテノ罪 (*negligentia*) ヲ、スベテノ兄弟タチノ裁判ヲ通ジテ (*omnium fratrum iudicio*)、下記ノ三方法ニヨリ罰スベキコト。即チ或ハ投獄、或ハ *mensa* カラノ隔離、モシクハ様々ノ種類ノ鞭打。シカシテ彼ラノ何人トイエドモ、地位ノ高低ヲ問ワズ、彼〔*praepositus*〕ノ承認ト許可ナクシテハ、一日タリトモソノ場ニオケルソノ職務カラ離レルコトガナイヨウニ、ソノ最モ慎重ナル留意ノ下ニ、彼〔*praepositus* ノ下〕ニ配屬サレタル *decani* ガ、〔彼ラヲ〕監視スベキデアアル。

Archidiaconus ノ職務 (officium) ハ、教会ノ位階ヲ、年令功績ヲ慎重ニ考量シテ秩序ズケルニアル。時々刻々、当該全地方ノ各聖務ヲソレゾレノ名ニ割当テ、或ハ功績ヲ克明ニ証明シ、且聖靈ノ恩寵ヲ、各自ニ見出シテコレヲ助ケル。スベテノ神ノ聖務ニオイテ、聖ナル神ノ教会ノ忠実ナル下級聖職者たちヲ教エ導クヨウ努メル。スベテノ、又 feria ノ祝祭ヲ、更ニ年間ヲ通ジテノ聖務ヲ聖歌ト誦誦トヨモツテ〔守リ〕、タダニ文字〔ノ知識〕ヲ正スノミナラズ、精神的ナ知識ヲモ capitulum ノ全聖職者ニ伝エル。自由人 (liberi) ノ自由 (libertas) ヲ証人ニヨツテ証明シ、他ノ servi ノ〔自由ヲ、彼ラガ〕ソノ意志デ、ソノ身分ニ帰ルベク、排除スル。シカシテ教会内政 (propria ecclesiastica) ニオイテ従属民 (familia) ヲ自由タラシメ、且外来民ヲ排除スル権限 (potestas) ヲ有シテイル。誦誦ノ又ハソノ位階ノ職務ノ怠慢ニ対シテ、〔ソレヲ犯シタモノハ〕 diaconus ニヨツテ、微罪ニイタルマデ (usque ad infimum) 破門ニ処セラルベシ。シカシテ若者たち〔ガ罪ヲ犯シタ場合ニ〕カカル過チニ対シテハ、〔彼ラヲ〕鞭打ニヨリ矯正スベシ。更ニ祝日毎ニ、奨励ノ言葉ヲ populus ニ対シテ準備シ且語り、カクテスベテ ordo ニヨリ、相応シク、最モ鞏固ナル熱意ヲモツテ、聖職者ヘノ聖別 (consecratio presbyteri) ニイタルマデ、〔彼ラ若者たちヲ〕真ノ宗教ヘト導クベシ。更ニ主ノ荘嚴祝日ニハ、獄舎ニアル都市 (civitas) ノ公ノ捕ワレ人ノ世話 (cura) ヲナスベシ。即チ〔主ノ荘嚴祝日トハ〕……(中略)……。同様ニ主ノ昇天〔祝日〕ト五旬節ニハ、スベテノカヲツクシテ彼ラヲ救イ、且彼ラニ寛大ノ身体的精神的服従 (obsequia) ヲ通ジテ、神ト人トノ恩寵ヨリ出ズル祝福ノヤスラギヲ備ウベシ。

シカシテ chorepiscopus ノ職務ハ……(中略)……。

シカシテ episcopus ハ、都市 (civitas) ノ内政 (propria) ヲ、聖別 (consecratio) ニヨリ、確認 (confirmatio) ニヨリ、解除 (reconciliatio) ニヨリ、又一般ニ大齋 (jejunium) ヲ布告スルコトニヨリ、或ハ神ニハタスニ相応シキ時ニハ、何ラカノ一般ニ〔対スル〕法 (ius) ニヨツテ処理スベキデアル。ソレラノ職務ノスベテハ、下記ノ如キ〔episco-

pus) 監督下にオカレル。即チ [episcopus ガ]、如何ニシテスベテノ職務ヲ最大ノ熱意ヲモツテ支配シツツ、完成ノ門へ導クカト云ウ〔態度〕ヲ、最モ精緻ナリ見ヨモツテ確立スルコト。〔又〕命令ニ〔ヨルニ〕アラザレバ、コレヲノ諸問題ニツイテ、 chorepiscopus ハ絶対ニ [episcopus ノ権限ヲ] 越ヘヌコト。〕

以上の長文の引用を要約することによつて、九世紀における Reims の capitulum の構成、性格及びその占める地位がほぼ明かになる。この capitulum は、 praepositus 及び archidiaconus をその頂点としていた。しかし前者の管轄は、教会財産及び mensa の管理、 canonici に対する日常生活の配慮と監督、その日課割当てと裁判権 (俗権) である。特筆すべきは、ここでは praepositus が複数の decani (doyens) をその下に有している点である⁽⁶⁾。これに対して、 archidiaconus の管轄は、むしろ教区行政及び聖務一般であり、あわせて capitulum の教育及びこれを通じての聖職者養成の責任を負っている。彼はその下に diaconus を執行機関として有している。これらは何れも episcopus の一般的な監督を受け、従つてこの段階では、未だ顕著な独立の傾向を示していなかつたと考えられるが、この史料の示す限りにおいて capitulum の存在理由は、 archidiaconus によつて管轄される面に存し、 praepositus の管轄な capitulum そのものを、こうした任務を遂行し得る態勢に維持する性格のものであつたと考えざるを得ない⁽⁷⁾。しかし clausura における共任生活そのものも、すでにして必ずしも厳格に維持されていたか否か疑わしい。しかして又、この限りでは、新カテドラルの建設等の大問題を、積極的に発議し、実行するような、教区の最終決定機関としての性格を、当初から有していたか否かは疑わしいと考えなければならぬ。

如上のカロリンガ朝期の capitulum 像を、時間の推移と共に修正し得る史料は、十一世紀になつてあらわれる。それは、一〇六八年頃のものとして推定される「Reims 教会司教座聖堂参事会員ノ全特権ヲフクム、Reims 大司教ノ誓約」(Jusjurandum archiepiscoporum remensium continens summam privilegiorum canonicorum cathedralis ecclesiae

remensis) である。⁽⁹⁾ 大司教に対立し得る自律的団体としての capitulum の確立を示すこの誓約条項は、その内容についても、一方では archidiaconus の完全な後退を物語るとともに、他方では異常に拡大された praepositus の権限を示している。即ち praepositus は claustrum (clausura) 内外の住居 (mansio) の immunitas と、それらの相互的自由処分権にともなつて、その裁判権を有し、⁽¹¹⁾ 又その職に属する権利や praebenda のみならず、capitulum に属している、聖俗両者の beneficia の利用について、自由裁量権 (libera facultas committendi) を有する。更に諸祭壇 (altaria) もその管轄下におかれていた。⁽¹²⁾ 更に重要なのは、「(Reimes ノ) 聖マリヤ〔カテドラル〕ノ諸所有 (possessiones) ト villae 及び我々 (capitulum) ノソレラ、更ニ我々ノ支配 (dico) 下ニマル都市 (urbs) 内及び郊外 (infra banmleugam) ノ土地ト…人トガ、」praepositus の支配及び裁判権に属して居ることである。⁽¹⁴⁾ 特に裁判権について、大司教の法廷に上訴されることはあつても、そのことは praepositus の判断にかかつて居り、大司教自身は上訴廷の権利 (ius) を有しなかつた。⁽¹⁵⁾ 裁判権は更に上級裁判権をも含んで居た。⁽¹⁶⁾ 但し、praebenda = stips canonica の配分権、即ち canonicus の任命権については、必ずしも praepositus の独占ではなく、大司教の發言権が相当に残されていたものと考えられる。⁽¹⁷⁾ 要するにこの誓約は、capitulum 対大司教の關係と云うよりは、むしろ praepositus の大司教に対抗し得るまでに拡大された権力を示すものとすら見られるであらう。

この時期から十二世紀の末にいたる時期は、いわゆる教会改革や、Regula S. Augustini の導入や、或はシトー派の活動等により、capitulum 自体にとつても大變動期であつた事は詳説を要しない。しかし Reims のそののみをとつてみる場合に、むしろ問題は、如上の一大権力を有する praepositus と、他の canonicus との關係であつたと考えられる。又大司教にとつてもかかる praepositus の存在は、決して歓迎すべきものではなかつたに相違ない。この問題を一挙に解決したのは、Louis VII の王妃である Adele de Champagne の兄弟であり、従つて Philippe-Auguste の叔父であり、次章に述べるようにカペー王家との關係においても重要な存在であつた大司教 Guillaume de Champagne であつた。彼の

一八八八年の《Carta de prepositura》は次のように述べらる。

「……(前略)……余ハ prepositura ノ故ニ、シハミン Reims ノ capitulum ト prepositus ノ間ニ生シタ諸問題ヤ諸係争ヲ終止セシメント熱望スルアマリ、我が最愛ノ甥 Ugo (Hughes) ヲ〔下記ノ目的ヲモツテ〕ロノロトニ導キインタ(= prepositus ニ任命シタ)。(a) 即チ〔彼(Ugo)ハ〕prepositura ノスベテノ雜權利(commodum)ニヨル諸收入ト裁判權(justicia)トヲ、同様ニ panetaria ノ贈与ヲ捨テ、且讓渡スル。且ソレラスベテヲ、我が手ニ、秤ニヨツテ(per librum)返還スベク、彼(Ugo)ニハ祭室ト capitulum ニオケル prepositus ノ權威(dignitas)ト、彼ハ(capitulum)ノ hominum (hommage) ノミガ残サレル。(b) シカシテ余ハコレラスベテヲ Reims ノ教会ニ未來永劫讓渡シ、且当〔教会〕ヨソレヲニツキ、 decanus ノ手ニヨツテ敘任スル。capitulum ハシカシテ、ソノ Valles Rodigionis ニ有スルスベテノモノヲ prepositus ニ、永久ニ所有スベク讓渡スル。但シ S. Nicholas (教会)ノ給養トナスベク保留シタ ecclesia ト decima ヲ除キ……。シカモ尚且 prepositus ハ capitulum カラ要求サレ召喚サレタ場合ニハ、アラユル強請ニヨルノデハナク、自発的意志ニ基ズイテ、教会ノ諸必要ヲミタスベク義務ズケラレテアルベシ。……(後略)……」(c)

この文書によつて明かにされることは、大司教 Guillaume de Champagne が、その甥 Hugues を prepositus としての機として、その職の大改革を行つたと云ふことである。即ち從來事実上 capitulum を支配してゐた prepositus は、この際にその實際的な権限のすべてを大司教の手にうばわれ、名目的な上席権のみがその手に残された。同時にうばわれたこの職に対する恐らくは莫大な praebenda に代つて、capitulum から「Valles Rodigionis」ニ有スルスベテノモノ^(a)を讓渡し、prepositus はその名目的な dignitas と新たに与えられた praebenda^(b)を換言すれば名実ともに新たになした prepositura にして、capitulum に homage をせねばならぬ。しかるに、capitulum に対する services を義務づけられたのである。かくして Reims の prepositus は、大司教に對抗することはおろか、

capitulum そのものにも服従する立場に置かれた。かかる大改革は、一一九二年に Hugues が死に、Baldunus が prepositus に任命せられるに伴つて発行された二文書——一は大司教側から、他は prepositus Baldunus 以下 canonici から——によつて、よりその様相を明らかにする。

第一の大司教側からの文書は、先⁽⁸⁾ Valles Rodignonis を prepositura から「全 capitulum 共通ノ意志ト同意ニヨリ…… Reims ノ教会へ」返還する事、及びその他一連の capitulum への贈与を列記した後に、次の如く述べている。

「……更ニ彼 (capitulum) ニ、Juvigniacum ノ decima ト、ソノニ Reims ノ thesaurarius ガ有シテイタ若干ノモノヲ、又カツテ Reims ノ thesauraria ニ属シテイタ Almericurtum ノ decimae ヲ与ヘル。シカシテソノ代償トシテ、Culmisiacum 河ノホトリニ位置スル Nove Ville ヲ、ソノ養魚池ト水車トモドモ、我が手ニ保留スル。ソレヲハカツテ thesauraria ノモノデアツタガ、〔教会〕法廷ニテ年収十 libra ト評価サレ〔タルニヨリ、ソレヲ〕上記教会ノ聖職者席〔ノ用〕ニ指定スル。且更ニ thesaurarius ガ Sopia 河沿イノ S. Stephanus ニ有シタル若干ノモノ、及び Bachelon 及び S. Lupus ノ祭壇〔収入〕ノ半バヲ〔与エル〕。シカシテ上記ノスベテヨモツテ、Baldunus prepositus ヲ、教会ノ名ニオイテ敍任スル。上記 canonici ハ、カクモ大イナル beneficia ヲ忘レルコトナク、又〔コレヲニ対シ〕感謝ヲオコタルコトナク、余 (大司教) 及び我がスベテノ後継者ニ、prepositura ノ donatio ト、prepositus ノ叙任権 (institutio) ヲ、コノ提案ニ対スル capitulum 一般ノ賛同ト同意トヨモツテ、譲渡セシコトヲ。余ハシカル際ニ、prepositura ニカツテアテラレタル諸収入ニ代エテ、B. prepositus トソノ後継者タルスベテノ prepositi ニ、Reims thesaurarius ガカツテ Montiacum, Betheneium 及び Villeir Asnorum ニオイテ所有セルトコロノモノヲ、永久ニ保持スベク指定シ割り当テル。〔但シ〕我が手ニオイテ処分サルベク保留サレル後者ノ villa 即チ Villeir Asnorum ノ葡萄酒収入ヲ除ク。シカシナガラ prepositura ガ空位ナレバ、prepositura ノ収入ハ、capitulum ガ受ケルベシ。

シカシテ誰ゾアロウトモ、ソノ際ニ prepositus タラシモノハ他ノ「教会」役職者ガナスガ如ク、可及的速ヤカニ hominum ヲ大司教ニササゲ、且 capitulum ニ忠誠ヲ誓ウベシ。又都市 (civitas) 内ニ居住セネバナラス、且上記 Reims 教会ガ、 prepositura ニツイテ、印璽ヲオシテ保有スル我々ノ文書ニフクマレタル事ドモヲ、忠実ニ遵守スベシ。但シソコニフクマレタル Valles Rodigionis ニ関スルコトヲ除ク。何トナレバ、ソレ (Valles Rodigionis) ハ、以後如何ナル prepositus ニヨツテモ、要求スル事ヲ許サレザルニヨツテ。コレラスベテハ、thesauraria ガ空位ナルヲモツテ行ワレタ。……」⁽⁸²⁾

この文書は要するに Valles Rodigionis をわずか四年にして prepositura からうばひ、これを capitulum に再譲渡すること、その代償としてたまたま空位であつた thesaurarius の praebenda を、ほとんどそのまま prepositus にまわして、新たに prepositura を形成すること、前記 Valles Rodigionis その他の「カウモ大イナル」 capitulum への譲渡の代償として、capitulum は prepositus の巨大なかつての praebenda とそれを叙任する権限とを、全面的に大司教に譲渡すること、及びその叙任権の譲渡にともなつて、prepositus が capitulum に対してのみならず、大司教に対しても homage 義務を負うことの確認等をその内容とする。即ちこの文書は、一一八八年の文書と、Valles Rodigionis の帰属を除けばほぼ同一内容であり、しかも同じく一一九二年の capitulum 側からの文書は、大司教側の文書を二つながら同時に確認してゐるのである。

「Balduinus, prepositus, Radulfus decanus, 及ユ Thomas cantor, 及ビ他ノ Reims 教会ノ兄弟タチ (canonici) ……尊崇スベキ我ラノ父、Reims 大司教 Willernus ハ、我ラト我ラノ教会ノ prepositus トノ間ニ生ズル、頻繁ナ諸問題ト訴エトニカンガミテ、我ラノ永遠ノ平和ヲオモンバカリ、且平和確立ノタメニ、書面ヲモツテ次ノ如ク命ジタ。…… (ここに一一八八年の大司教文書が挿入される。)…

コレラノコトガナサレシ後、時移り、上記 Ugo 歿シ、prepositura 空位トナル。ソノ際〔新〕prepositus 選出ヲメグリ、我ラノ兄弟タチノ多クハ prepositus ヲモツコトヲ欲セス、他ハ prepositus ヲモツベク欲スル旨ヲ強ク主張シタメ、些カモ〔意見ヲ〕統一シ得ナカツタ。此処ニオイテ平和愛好者タル上記大司教ハ、カツテ prepositura ニアテラレタル Valles Rodigionis ヲ、我ラニ、教会ノ自由ナ利用ニ〔供スベク〕返還譲渡シ、且目下空位タル thesaurarius ノ所有ヲモツテ、prepositura ヲ形成シタ。ヨツテ我ラハ彼カラ受ケタル上記、並ビニ他ノ多クノ beneficia ヲ忘レルコトナク、……(此処に上掲一一九二年の大司教文書末尾の部分が挿入される。……)⁽²¹⁾」

以上挙げた三文書を通じて最も特筆すべき事は、一一九二年の大司教側と capitulum 側との文書が、双方とも物語つてゐる prepositus 叙任権の大司教への譲渡と、prepositus が負うにいたつた大司教と capitulum 双方への homage の義務である。capitulum 側の文書が明らかにしているように、この職の敘任は選挙によつたが、この選挙を円滑に行わしめない事情が、Valles Rodigionis をめぐつて発生した模様である。我々はここで、上掲三文書を通じて、絶えずこの所領の帰趨が、重要な主題として繰返されて来たことに注目せねばならない。そしてこの所領は、Champagne 伯と capitulum との共同所有であつたものを、Champagne 伯の弟である大司教 Guillaume が、そのうちの capitulum の分を prepositura に設定して、それを「甥」Hughes に与えた。そして Hughes の死後、Champagne 伯の所管と事実上分ちがたいこの prebenda の引うけ手がなくなつたものと解し得る。そこで大司教は一方では最終的に紛争の中心となつた prepositus の叙任権を取上げ、他方では Valles Rodigionis を capitulum に再譲渡した。こゝして capitulum の手に再度わたつたこの所領について canonici のうちの何人がその管理の責任を負つたであろうか。一一八八年の大司教文書は、かつての prepositura を教会に引渡すに際して、それが decanus の手をへた事を物語つてゐる。そしてこの decanus は、一一八四年の当該所領確認文書においては、大司教によつて「愛スル我が息」と呼ばれて、確認の立会人

の一人に数えられ、又一一九二年の *capitulum* 側文書では *Baldunus prepositus* の次位に名をうらねている *Radulfus* である。この所領が、可能な限り *Champagne* 伯家の人物によつて保有される事が望ましい条件にあつたとすれば、一九二二年の場合にも、*capitulum* 側でこの所領を引うけたのは、伯家の血縁者であるこの *Radulfus decanus* ではなかつたであらうか。

かく推定することによつて、我々はこれら三文書によつて物語られている *prepositura* をめぐつての一連の問題に、別個の視角を見出し得るであらう。即ち *prepositura* のこの時期における大変革は、その底流として、*Reims* が属している領邦 (*principauté*) の主であり、且当時正にカペー王家と姻籍関係によつて結ばれていた *Champagne* 伯家の三人、*Guillaume*、*Hugues* 及び *Radulfus* の意志と利害とが働いていたのである。その上に立つて、大司教 *Guillaume* は、*prepositus* からその実質をすべてうばい去つた上に、*homage* と *fidélité* と云う封建関係をそのまま導入することによつて、これを大司教に対しても、*capitulum* に対しても従属する地位においたのである。しかも一九二二年の大司教文書は、他の *personatus* 即ち *capitulum* の役職者たちも、大司教に対して *homage* の義務を負つていた事を暗示している。十二世紀末の社会において、最も現実的且可視的な人間関係の形成手段であつた *homage*こそ、大司教 *Guillaume* が *capitulum* を自己に服従せしめる最も有効な手段であつたのである。

十一世紀末の *Reims* の *capitulum* につては、その諸特権 (*privilegia*) は確立されて居り、²⁴それらはほとんど *prepositus* によつて代表されつつ行使されていた事はすでに述べた。従つて十二世紀末における、如上の *prepositura* の名目化は、以後 *decanus* の地位を表面に押し出したとは云え、²⁵上記の大司教側からとられた対策と相まつて、明かに *capitulum* そのものの大司教に対する自律性の減少を結果したものと考えられる。そしてこの事は、差当り十三世紀前半における両者の相関々係を規定する基調であつたとせねばならない。²⁶

大司教側からする如上の *capitulum* に対するコントロールの試みは、同時にこの団体に、カロリング朝期のそれに等しい、本来的な機能と性格をとりもどかせようとする試みであつたとも考えられる。この事は上掲の一一九二年の大司教文書にも相当明瞭に物語られている。

「……コレラスベテヨ余ハ *canonici* ニ、〔彼ラノ間デ〕分配スベク与エル。彼ラハ、モシ分配ヨナスニ際シテコレニアズカルモノタラント欲スレバ、*Epistola* ノ初メカラ *Agnus Dei* ノ終リマデ、ミサヲ献ゲネバナラズ、第六時ニオイテモ〔同様デアル〕。更ニ公正且必要ナ原因ガ彼ラヲ呼ビ出スニアラザレバ、彼ラガ祭室カラ出ズルヲ許サナイ。」⁽²⁷⁾
このことは更に、*Reims* の *capitulum* に対して、一一九〇年には *Sainte-Geneviève de Paris* 修道院長 *Stephanus* が、一二〇〇年には教皇 *Innocentius III* が、それぞれ書簡⁽²⁸⁾で、共住生活 (*vita communis*) をより厳格に守るようにおすすめしている事実と符合する。

以上極めて大ざっぱに、しかも可能な限り史料に忠実に、古典期ゴティック様式のカテドラル建立が立案される時期にいたるまでの *Reims* の *capitulum* の性格機能が如何に変化して来たかを概観した。これを仮に十一世紀末に限れば、そこにあらわれる像は、*Gimpel* が考えたように、大司教をさしおいて、独自の権限をもつてカテドラルの様式を決定し、立案し、その建設に必要な資金を調達し、長時間にわたつて工事を遂行し得るが如き法人格であつた可能性を有する。しかしながら、十二世紀末から十三世紀初に、特に大司教のイニシアティブをもつて、著るしく性格を変えられた *capitulum* に、我々はその可能性を見出し得るであろうか。史料が明文をもつて可否何れの可能性をも支持せぬ以上、我々は推定に頼る他はないが、筆者には少なくとも、十三世紀初の *Reims* の *capitulum* が、その意志と責任とにおいて、カテドラルの建設にふみ切つたとは考えられない。そのイニシアティブは、やはり大司教の側にあつたと考える事がより妥当であらう。

このことはしかしながら、次に記すような可能性を否定するものではない。第一に、大司教が決定したカテドラル建設について、*capitulum* がその執行機関の役割を担当することである。特に経済的な諸問題について、このことは充分な可能性がある。第二に、彼らが逆に、大司教の意志を動かし決断せしめる事である。このことは先ず彼らが *hommage* によつて大司教と結びつけられていたことから、当然「助言」(*consilium*) の義務を負つていたであろう点から可能であるし、又十二世紀末以後、司教選挙権が殆んど *capitulum* によつて独占されていたとすれば、すでに選挙の段階で、彼らの意にそう人物が選出され得ると云う点からも可能である。第三に、カペー王権との結合の可能性である。司教、大司教とカペー王家との結合は別に論ずるとして、少くなくとも Reims においては、Champagne 伯家が王家と婚姻関係を結んだ時期に、当伯家の出身者が血縁関係によつて *capitulum* を左右した事はすでに述べた。それ以上に、上記の司教選挙権の独占が、司教たるものは先ず *canonici* であらねばならぬと云う原則に拡張されやすい点や、更に上記 *hommage* の関係が、*praebenda* を通じて、個々の *canonicus* と王とを結びつけている可能性も亦考慮されなければならぬであろう。こうした諸々の推定から、司教、大司教と王権との結合以前に、*capitulum* と王権との結合を想定することも可能であるとせねばならない。これらの諸問題の考察は、何れも次章以下にゆずりたいと思う。

註

- (1) Gimpel, *Les bâtisseurs*, p. 55.
- (2) 例えば Stein, *op. cit.* はほとんど司教座聖堂参事会がカテドラル建設に関して果たした役割についてふれていない。
- (3) 以下本章においては、Reims をその中心にすすめることとなる。これは司教座聖堂参事会の研究が、充分に進んでゐるとは考えられない現状において、史料を断片的なものを除くことは、

Varin, *Archives administratives de la ville de Reims, collection de piéces inédites pouvant servir à l'histoire des institutions dans l'intérieur de la cité*, t. I et I 2, Paris, 1839, Collection des documents inédits. (以下 Varin, *Arch. admin.*, t. I 2. と引用) 以外に求め難いと云う制約による。(4) これらの問題に関しては差しあたり *Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastiques*, t. XII, col. 353-405, v° 《*Chanoines*》 par Ch. DEREINE; E. Amann et

fratrum iudicio puniens his tribus modis, id est, aut carcere, aut separatione mensae, sive in omnium verberum diversitate. Cujus etiam prudentissima circumspectio decanis sibi suppositis invigilare debet, ne unus quidem, a maximo usque ad minimum, absque ejus conscientia et licentia unius diei spatio nequaquam ab officii sui loco destit.

Archidiaconi officium est, gradus ecclesiasticos summa cum providentia aetatum et meritorum ordinare: de tempore in tempore nominibus certis uniuscujusque officium de omni regione praefigere, subtiliter merito probare, et gratiam Sancti Spiritus unicuique investigando ministrare: in omnibus divinis officijs sanctae Dei ecclesiae fideles ministros erudiendo et excolendo efficere: festivitatum omnium ac feriarum, necnon totius anni officia in canonicis et lectionibus, non solum litteraturam corrigere, sed spiritalem intelligentiam omni clero in capitulo tradere, libertates liberorum cum testibus probare, alienorum servorum ad gradus venirevolentium exigere, potestatem etiam habens libertatem ecclesiastica propria de familia facere, et alienis exigere. Pro neglecta lectione aut officio gradus sui a diacono usque ad infimum excommunicare: etiam et juvenculos talibus pro excessibus verberibus arreare: verbum etiam faciendi ad populum in diebus festis

providere et facere: et sic omnia per ordinem digne usque ad consecrationem presbyteri studiosissima intentione verae religionis perducere: victorum etiam publicae (*publicae*?) civitatis ex carcere curam in festivitibus solennibus Domini gerere, id est, in Natale Domini, in Epiphania, in initio Quadragesimae, media Quadragesima, in Palmis, in sabbato sancto, et in die sancto Paschae; similiter in Ascensione Domini, et in Pentecoste summa cum diligentia eos excipere, et eis obsequia benignitatis corporalia spiritaliaque, ex divinis et humanis beneficiis refectionem benedictionis parare.

Chorepiscopi vero ministerium est, omnem sacerdotalem totius regionis sibi commissae conversationem corrigere atque dirigere, id est, in conficiendis divinis sacramentis et baptisterio omnium intellectum aperiens excitare, populum regionis praedicare, confessiones exigere, poenitentiam cum discretione caute imponere, hospitalitatem sectari, infirmos visitando obsequia benignitatis et benedictionis, et sanctae unctionis inferre: communioni sanctae dignos fieri populos assidua communitone exercere, mortuos cum commendationibus animae et orationibus dignis obsequiis sepulturae venerabiliter tradere, pro vivis etiam ac defunctis totius Ecclesiae filiis rationabili assiduitate exorare. Insuper vero omnia quaecumque intra ecclesiam

et extra ecclesiam, in claustris et in omnibus habitationibus a maximo usque ad minimum quemcumque viderit negligere, secundum ecclesiasticum correptionis modum semper corripiat, et omnem veram religionem, prior ipse faciundo, omnes facere doceat. Et hunc modum nequaquam, nisi praecipiente episcopo, de causis subsequentibus excedat de omni jure consecrationis.

Episcopum vero civitatis propriae disponere oportet de consecratione, de confirmatione, de reconciliatione, et de publico indicendo jejunio, aut aliud publici juris pro tempore digno Deo debito. Cujus officii summa speculationis haec est, ut et subtilissime providendo insistat qualiter omnium officia studiosissime gubernando ad portum perfectionis dirigat; quibus in causis, nisi jussus, chorepiscopus nullatenus excedat.

(6) Cf. Varin, *Arch. admin.*, I, p. 31, n. 1.

(7) capitulum の定員は、それぞれに大きな開きがある。差当り Reims の数は不明であるが、Chartres は七十二を数え、その大ききやて合名があつた。彼らはヒヨラルキーを形成し、一定数の役職者 (dignitaires) によつて管理されていた。それらの名称、教等も一定ではなご (Chartres には十七) が、一般に共通して見られる役職及びその職務は次の通りである。

(1) *decanus* (doyen) 又は *praepositus* (prévôt) 管轄は司
用史料の通り。

(ii) *cantor* (chancre) 又は *primicerius* (primicier) 第一位の役職。ミサ典社執行の指揮。

(iii) *scolasticus* (écolâtre) カテドラル附屬及びその他教区学校の指導。教師の任命、書籍の保持、その他。

(iv) *cancellarius* (chancelier) 文書の発行、保存。印鑑の保持。

(v) *camerarius* (chambrier) 又は *thesaurarius* (trésorier) 会計担当。

(vi) *sacrista* (sacristain) 又は *custodes* (gardiens) 聖器庫担当。

以上のや (ii)・(iii) 等は、引用史料中 *archidiaconus* の管轄下に在居。Cf. A. Mann et Dumas, *op. cit.*, pp. 251-254; Gaudemet, *op. cit.*, pp. 189-190; Derenne, *op. cit.*, col. 368-369; *Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastique*, t. XII, v° 《Chartres》, par Y. Delaporte, col. 554.

(8) 引用史料中 *praepositus* の管轄「第一ニ身体的配慮トハ、clausura ニオケルンデ」……或ハ各個ノ住居ノ必要品ヤ……」ハ住居 (habitatio) が *clausura* の内外何れにあるかが問題である。遅くとも十一世紀には、*canonici* の住居 (mansio) は、*clausura* の内部にあると同時に外部、即ち Reims 市内にもあつた事が、一〇六八年頃と推定される史料 (次註参照) から明かである。Varin, *Arch. admin.*, I, n° XXXVII, p. 226, 《Ut immunitatem mansionum nostrarum infra

claustrum,」: «Ut in mansionibus nostris, quas extra claustrum, in civitate habemus, ...」註①参照。

⑧ Varin, *Arch. admin.*, I, n° XXXVII, pp. 223-229. 』の《*juramentum*》は、新たに選出された大司教が、Reimsに入つて大司教位を取得せんとする際に、司教座聖堂参事会に対して誓約するものである。前文、約二十項の特権条項・新大司教の答(*responsio*)からなるこの誓約は、*écolâtre*により新大司教に対してよみ上げられ、ついで大司教が答を読み上げる。その答は次の通りである(p. 229)。「Reimsノ司教ニ聖別サレタル我…名…ハ汝ラノ慣習タルコノ *immunitas* ヲ当聖処女マリアン祭壇ニオキ、ササゲ、引ワタシ、且コレヲ、我が生クル限り、神モ御照覽アレ、侍立セル証人ノ下ニ、善意ヲモツテ遵守センロトヲ約シ、且誓フ。カク神我ヲ助ケタマイ、コレヲ聖福音書ニヨリ〔誓フ〕。」

この *formule* のテキストの成立は、用語・文体と共に、特権或は慣習——特に法廷決闘(註④参照)——から十二世紀以前と推定される。しかも条項中に「大司教 *Gervais* (+1067) ト汝ラノ先任者カラ受ケタ *beneficium* ニ *cena Domini* ニ〔*Ut in cena Domini beneficium quod a Gervasio archiepiscopo, et predecessoris vestris accepimus*〕と云う言及があるところから(*loc. cit.*, p. 229) 一〇六八年頃と決定された(*loc. cit.*, p. 223, n. 2.)。

⑨ Gaudemet, *op. cit.*, pp. 191-192.

⑩ Varin, *loc. cit.*, p. 226:

Ut immunitatem mansionum nostrarum infra claustrum,

コティック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

et eas invicem dandi, vendendi, seu commutandi liberam licentiam, absque ullius persone contradictione habemus, et si ibi, quod absit, aliquo casu, criminale aliquod indicerit, vel etiam si seditio qualibet ex causa orta, aliquod delictum incurrerit, ut inde iusticia in manu prepositi, ceterorumque canonicorum absque ulla contradictione habeatur.

Ut in mansionibus nostris, quas extra claustrum, in civitate habemus, etiam in mansionibus servitium nostrorum, seu in alodiis nostris, nulla redibito seu pensio inde exigatur; non vini, non annone mensura, non publica urbis placita, non alicujus rei inde exigatur obsequium.

「我々ハ *claustrum* ノ内ナル *mansiones* ノ *immunitas* ト、ソレヲ相互ニ与エ、売リ、或ハ交換スル自由ナ権限(*libera licentia*) トヲ、何人〔ニヨル〕何ラノ反対ナシニ有スルコト。シカシテ若シニコニ、万一何ラカノ場合、何ラカノ犯罪ガ犯サレ、或ハマタ若シモ何ラカノ原因デ何カノ叛乱ガ起リ、何ラカノ軽犯罪ガ生ジタ場合ニハ、ソノ際ノ裁判権ハ *prepositus* ノ手ニ、又 *canonici* ノ何人カノ〔手ニ〕何ラノ反対モナク保持セラレルコト。

claustrum 外ノ *civitas* 内ニアル我々ノ住居ニオイテ、更ニ我々ノ利用スル住居内ニオイテ、ハタ又我々ノ所有地内ニオイテ (*in alodiis nostris*)、何等ノ課税モ貢納モ、ソロカラ強請

サレザルコト。葡萄酒ニヨミツテモ耕地ノ収獲物ニヨミツテモ、都市ノ公ケノ裁判法廷ニヨミツテモ、他ノ如何ナルモノニヨミツテモ、ソコカラ服従ヲ強請サレルコトナシ。」

(2) Varin, *loc. cit.*, p. 227 : Ut majori preposito sit libera facultas, ex consilio canonicorum, committendi preposituras et cuncta beneficia servientium, tam clericorum quam laicorum, que ad nostram pertinent communitatem.

「major prepositus ハ、 canonici ノ助言ニキトズイテ、 prepositura ヲ、又我々ノ communitas ニ所屬スル、聖俗両 beneficia ノ利用ヲ、併セヨシ自由ナ権能ヲ有スルコト。」

(3) Varin, *loc. cit.*, p. 227 :

Ut altaria que in communi obtinemus abque personis, in providentia prepositi habeantur; nec in eis, seu in hiis que privatim possidemus, divinum interdicatur officium, nisi synodali et canonicorum consentiente decreto.

「我々が特ニ人ヲ定メルコトナク共通ニ維持スル祭壇ハ、 prepositus ノ配慮ノ下ニ所有サレルコト。コレヲ〔祭壇〕ニオイテハ、或ハ我々〔ノ誰カ〕ガ個人的ニ所有スルモノニオイテモ、教区公会議又ハ canonici ノ議ヲヘテ定メラレタルニアラザンハ、〔其処デ〕〔神ノ聖務〔ノ執行〕〕ハ禁止セラル。」

(4) Varin, *loc. cit.*, pp. 227-228 : Ut in possessionibus et villis sancte Marie, et nostris etiam, et in terris que nostre dittonis sunt infra urbem et infra banmleugam,

videlicet et in Ausonno, in Tendente Cauda, in Curcellis, in atris, et in terris sancti Martini, in suburbio a porta Vidale usque ad Duos Pontes, cum tota ins utraque vulgo dicitur Morillis, necnon etiam in aliis villis et terris, sive hominibus ubicunque sint, nullam redhibitionem, nullam pensionem exigatis. Et si causa incidit ibi, agendi placiti ex aliquo negotio, prepositus inde in eadem potestate causam audiat, atque iusticiam faciat. Si autem in tantum controversia prevaluerit, ut res ex iudicio ad duellum traducatur; ut illud in civitate, si ita prepositus constituerit, in curia sancte Marie transigatur, absque eo quod vos nullum jus ibi, neque ministeriales vestri ullam potestatem habeant.

「〔Reims ノ〕聖ペリヤ〔カナドラル〕ノ諸所有ト villae 及ビ我々〔capitulum〕ノソノラ、更ニ我々ノ支配下ニアル都市内及ビ郊外ノ土地、即チ Ausonnes (Ausonnes), Tendente Cauda (Tainqueux), Curcellus (Courcellès), 聖ペルタン〔修道院〕ノ atrium ト土地、一般ニ Morillis ト呼ハレル島全部トソクモ Vidale 門カラ Duos Pontes ニイタル郊外 (suburbium) 更ニ同様ニ他ノ villae ト土地ニオイテ、或ハ〔上記ノ地〕何処ニマロウトモ homines ニ対シテ、何等ノ課税キ貢納モ強請サレザルコト。シカシテ若シ、何ラカノ係争 (negotium) カラ、コロニ法廷ニカカワルガ如キ事件ガ生ジタ場合ニハ、 prepositus ガ、ソノ権限 (potestas) ニオオテソノ

事件ヲ聴取シ、シカシテ裁判ヲ行ハズシ。シカシナガラ若シカクナス際ニ反対意見ガ優勢ナラバ、事柄ハ裁判ニヨリ〔法廷〕決斷ニ引ツタサルベク、〔又〕 *prepositus* ガソノヨウニ定メルナラバ、都市内ノ (in civitate) 聖マリヤノ〔カテドラル〕法廷 (curia) ニ移管サルベシ。〔但シ〕ソノコトニツキ汝 (大司教) ハ、ソノ何等ノ權利 (jus) ヲモナク、又汝ノ ministeriales ガ何等カノ權限 (potestas) ヲ有スルコトナシ。〕

(15) 前註參照。

(16) Varin, *loc. cit.*, p. 228 : Quod si forte aliquis de hominibus nostris, quod absit, aliquem vestrorum hominum flagellaverit, vulneraverit, occiderit vel aliud aliquid commiserit unde ministeriales vestri conquesti fuerint, ut prepositus vel ministeriales nostri, inde justiciam faciant infra potestatem ad quam ipse pertineat.

「モシタマタマ我々 (capitulum) ノ homines ノ何人カガ、万一汝 (大司教) ノ homines ノ何人カヲ、打チ、傷ツケ、殺シ、或ハ何ラカ他ノ犯罪ヲ犯シ、ソノタメ汝ノ ministeriales ガ求メラレルコトアラズ、〔ソノ際ニハ〕 *prepositus* 又ハ我々ノ ministeriales ガ〔求メラルベク〕、シカシテ彼 (犯人) 自身ガ屬スル〔權限内デ、裁判ヲ行フコト。〕」

(17) Varin, *loc. cit.*, p. 229 : Ut non statim, cui libitum vobis fuerit, absque scitu prepositi, ceterorumque magistratum, stripem canonican conferatis.

「汝 (大司教) ニトリテ喜ハシキコトニハ、 *prepositus* 又ハ

ゴティック古典様式カテドラルの成立とその背景 (森)

何ラカノ *magistrus* ノ承認ナシニ、 *stips canonica* ヲ讓渡スルコトニツキテハ、定メラレタルコトナシ。〕

stips canonica 及 *praebenda* の同義語 (cf. Varin, *loc. cit.*, p. 223, n. 2.) の本来 *mensa* の一部を代體して *canonici* の生活を保證する性格を有していた *praebenda* 及 十世紀以後次第に獨立して *sui juris* の性格を有して honor 化した。從つて *capitulum* 構成員各自の職務は、それぞれ *praebenda* と不可分のものとなる。この段階になつて「聖職者を司教座聖堂參事会の成員として受入れられ、彼は *praebende* 及び *re-videre* (Amann et Dumas, *op. cit.*, p. 262.)」

Cf. aussi Lesne, *L'article cité*. 本論文の著者は Amann et Dumas, *op. cit.*, pp. 261 et sq.

(18) Varin, *Arch. admin.*, I, pp. 411-412, n° CCLXXIX, Carta de prepositura.

Willernus Dei gratia Remorum archiepiscopus... Pastoralis cure sollicitudo nos ammonet subditis nostris, quoniam tempus admissit, pacem et quietem providere. Inde est quod nos, questiones et lites que occasione prepositure inter capitulum remense et prepositum sepius emerant, terminare ad plenum cupientes, karissimum nepotem nostrum Ugonem ad hoc induximus ut prepositure redditibus in omnibus commodis, justiciis, similiter et donationi panetarie cederet, et cessit; et omnia hec in manu nostra per librum resignavit, retenta sibi dumtaxat prepo-

siti dignitate in choro et capitulo, et hominibus suis. Nos vero omnia hec ecclesie remensi perpetuo profutura concessimus, et eam per manum decani de his investivimus. Capitulum autem omnia que habebat in Valle Rodigionis preposito in perpetuum possidenda concessit, preter ecclesias et decimas quas sibi retinuit ad pastum B. Nicholasii faciendum, quem ea que prius fiebat sollempnitate se deinceps esse facturum promisit. Verum et prepositus cum requisitus fuerit et vocatus a capitulo, absque omni executione, voluntate promptissima, ecclesie necessitatibus adesse tenebitur. Ut autem hec rata, etc., etc. Actum anno dominice incarnationis millesimo centesimo octogesimo octavo. Datum per manum Lambini cancellarii nostri.

(8) Ugo, prepositus の前任者 Bihardus が 一一八八年一月廿五日に死した。(Varin, *Arch. admin.*, I, p. 409, n.° CCLXXVII, 《Notitia de obitu Bihardi prepositi remensis.》) 従って Ugo が ばやふで本文書の發行より前後して prepositus となった訳である。Reims の capitulum にあける prepositus の選任は、従来は選挙であったが、この時から大司教の任命になったのである。これを「本文書における 《ad hoc induximus》」と云う表現や、本文書の後半に見られるように、prepositura の諸権利が「たんとすべて大司教の手に帰っている事情」或は後述する一一九二年の文書に記載されている Ugo の後任者

Baldunus の選任經過等から推定する事が可能である。 Cf. Varin, *loc. cit.*, p. 411, n. 2.

(9) 《per librum》と云ふ表現は「ローマ法の契約《nexum》を想起させる。この契約は《aes et libra》によつて行われ、形式上最も嚴しきものである。此処では「必要ナ形」の「ロテマック」の「リ」が行われた意であると。 Cf. P. F. Girard, *Manuel élémentaire de droit romain*, 7^e éd. revue et augmentée, Paris, 1924, p. 500 et sqq.

「祭壇に capitulum ニキケル prepositus の権威」によつて、典拠に際しての上位権と capitulum の議長権を意味するものと思われる。Reims にある最古の規定書 Le livre des réceptionsによれば、prepositus は次の如き常用句によつて capitulum に選任される。「ロテマック」(capitulum)に提出された諸事ニツキ、司会者、發議者、結論者ニガタメニ、capitulum ニ既して授かる。」(Accipe locum in capitulo ad praesidendum, proponendum et concludendum super rebus in eo propositis.) (Varin, *loc. cit.*) 「彼等ノ hominum」によつて prepositus が「任命」されるの職の故に、capitulum に於ては hommage を義務づけられたことを意味する。Le livre des réceptionsによれば、「第一ノ司会権ノ故に」(ratione praesidentiae primae) 行われる。その定式は次の通りである。即ち「両手ヲアワセテ」般ノ方式通り (hominium ヲ行ウ) 他ノ「左手ヲカク拳ヲ、右〔手〕ニ capitulum ニマズケテ

hominium ヨササケル。』(Praestat hominum sinistra manu levata tantum, dextra capitulo reservata, caeteri more communi duabus manibus junctis.) (Varin, loc. cit.)

⑥ Valles Rodigionis には、Champagne 伯の Reims の canonici との所有諸権利が及んでいたこととを、一七八四年に Champagne 伯 Henri が十字軍出征にあたり後の紛争を避けるために、大司教 Guillaume をして「dilectus filius noster R. (adulfus) 及び他ノ Reims 教会ノ canonici」立会との下に確認せしめしむ。

「……シカシテ comes へ慈悲深ク請願ヲ認メ、由ラト Reims ノ聖マリア教会ノ canonici トガ共通ニ所有スルコト、又軍馬ニツイテハ、スベテノ権利トスベテノ方法ニヨルスベテノ収益ガ、ソレガ何テアロウトモ、Valles Rodigionis ノ iurisdiclio ニ属スルコトヲ認メタ。但シ彼 (comes) 自ラガシラニ滞在スル際ニハ宿泊権 (gistum, gite) ヲ〔有シ〕得ルコト、或ハ年一度ノ部分毎ニソレヲ (軍馬ヲ) ヲ戦場ニ出シ得ルコトヲ除ク。又ソノスベテガ canonici ノ所有ナルト認メラレタル Singaudi curt ト呼バレル villa ヲ除ク。更ニ次ノコトハ comes ト canonici トノ〔共通事項〕デアル事ヲ承認スル。即チ当該峡谷 (valles) ニオイテハ、ministeriales ガ自由ニ軍馬ノ法ヲ施行シ、且彼ガソノ収入ト収益ヲ共通ニ集メ、且軍馬ニツイテ分割スルコトヲ。更ニ次ノ事ヲ承認シ且定メル。〔即チ〕彼自身モ、ソノ後継者ノ誰モ、上記峡谷ニ所有ス

ルコトヲ、与ヘ、売り、交換シ、入質ヲ強請シ、或ハ何ラカノ方法ヲ手バナナスコトヲナシ得ヌコトヲ。更ニ同様ニ次ノコトヲ承認スル。即チ Azona 海ニシツタ Cis ニオイテ、上記教会ハスベテノ iusticia ト forisfactus ノ三分ノ一ヲ有スル。但シ comes トソノ後継者ノモンタル謀殺ト誘拐トヲ除ク。シカシテ Jaiacum ノ地ニオイテハ、全 iusticia ガ上記 canonici ノ〔モノ〕タルヲ承認スル。〔但シ〕竊盜ハコレヲ、彼 (comes) 及ビソノ下役ニ、ソノママ iusticia ヲ行フベク引ワタスコトヲ除ク。……」

Varin, *Arch. admin.*, I, pp. 407-408, n° CCLXXIV, Carta pro Valle Rodigionis. Ann. 1184.

Willhelmus... Remorum archiepiscopus, etc., etc.
Noverint universi, quod cum dilectus frater noster comes H. Ierosolymam profecturus esset, dilecti filii nostri R. decanus, et quidam alii remensis ecclesie canonici, eum Trevis adierunt, rogantes ut coram nobis ibidem presentibus, recognosceret quid juris haberet in Valle Rodigionis, et quid juris ibidem haberent canonici ecclesie B. Marie remensis, ne qua inde in posterum inter ipsum vel heredes suos, et prelatos canonicos, posset oriri dubitatio. Comes vero benigne ipsorum annuus petitioni, recognovit se et canonicos habere in communi et ex equo, omnia iura et omnis (sic) proventus in omnibus commodis quecumque spectant (sic) ad iurisdictionem Vallis Rodi-

gionis, hoc excepto quod ipse posset ibi gistum accipere si
 presens esset, vel sui semel in anno, si forte per partes
 illas mitteret eos in expeditionem, et excepta villa que
 dicitur Singaudicurt, quam totam esse propriam canoni-
 corum recognovit. Preterea comitis et canonicorum est, ut
 recognovit, ministeriales in eadem valle libere et equa
 lege ponere, qui redditus suos et proventus communiter
 colligant, et ex equo dividant. Recognovit etiam et con-
 cessit quod neque ipse, neque heredum suorum aliquis,
 potest dare, vel vendere, aut permutare, seu pigrori
 obligari (*sic*), aut ullomodo extra manum suam mittere,
 que habet in predicta valle. Preterea nichilominus recog-
 novit quod apud Cis super Azonam, dicta ecclesia terci-
 am partem omnium iusticiarum et forisfactorum. In terra
 vero sua de Joiaco, totam iusticiam predictis canonicis
 recognovit, excepto quod latronem ei et servientibus ejus
 nudum pro iusticia facienda reddere debent. Hec siqui-
 dem omnia ecclesie remensis (*sic*) et canonicis suis sicut
 scripta sunt, perpetua pace possidenda concessit. In hujus
 rei, etc. Data per manum Lambini cancellarii nostri,
 ab incarnatione Domini anno M^o C^o LXXX^o III^o.

本文書が明かにいついぬかへは Valles Rodigionis は文書
 通り峡谷であり、殆んど分割不可能な程に耕地を欠く地域であ
 る。従って、主産業は軍馬の牧畜であり、その性格上 comes

は canonici だけのや ministeriales の共同管理にならなかつた
 といふのである。またその canonici のみの所領である villa 及び
 terra の裁判権は comiti 及び三つの伯爵に、そのうちの
 場合により裁判権は comes に保固されたのである。従って、それ
 が prebenda を形成した場合は、その重要度はかなり高くなる
 であろう。更にその comiti 及び comes の血縁者である大
 な領主となつたといふのである。

⑤ Varin, *Arch. admin.*, I, pp. 420-422, n^o CCXCII.
 Ann. 1192. Carta qua Willelmus remensis archiepiscopus
 vallem Rodigionis, et plura alia confert capitulo remensi.

Willelmus Dei gratia Remorum archiepiscopus sancte
 romane ecclesie, etc., etc. Noverint tam presentes quam
 futuri, quod nos statum ecclesie remensis per amplius aug-
 mentare cupientes, redditus de Valle Rodigionis prius
 ad usum prepositure remensis deputatos, communi volun-
 tate totius capituli et assensu, capituloque ad hoc solemp-
 niter convocato, eidem remensi ecclesie liberaliter [red-
 dimus et] contulimus. [Contulimus etiam?] altare de Gar-
 merevilla cum omni censu quem ibi habebamus, altare
 etiam de Villa Tardani, que canonici remensis ecclesie,
 Philippus vicedominus, Fulco, et Leo in manu nostra
 resignaverunt; capitulum vero predicta altaria eis concessit,
 sicut prius habuerant quoad vixerint, sub trecentu duorum
 solidorum singulis annis solvendorum, ita quod post eorum

obitum libere ad ecclesiam revertentur. Preterea dedimus eis decimam de Juvigniaco, et quicquid ibidem thesaurarius remensis habebant, et decimam de Almericurte que antea ad thesaurarium remensem pertinebant; et in recompensatione Nove Ville site juxta Culmisiacum, cum vivario et molendino, que in manu nostra detinuitus, et que prius fuerant thesaurarie, stallos sepe dictate ecclesie assignavimus in foro ad estimationem decem librarum censualium; et etiam quicquid thesaurarius habebat apud S. Stephanum super Sopian, et medietatem altarium de Bachelon, et de S. Lupo; et de his omnibus predictis, B. (Balduinum) prepositum, nomine ecclesie, investivimus....

Predicti vero canonici tam magnifici benefici non immemores, nec ingrati, nobis et omnibus successoribus nostris concesserunt donationem prepositure et prepositi institutionem in perpetuum habendam, approbante universo capitulo et assentiente, et ad hoc convocato. Nos vero loco reddituum prepositure prius assignatorum, B. preposito et omnibus successoribus suis prepositis, in perpetuum obtinendum assignavimus et contulimus quicquid prius habuit thesaurarius remensis apud Montiniacum, Beheneium et apud Villeir Asnorum, exceptis redditibus vini ejusdem ville, scilicet Villeir Asnorum, quos in manu

nostra et dispositione retinimus. Vacante autem prepositura, redditus prepositure capitulum percipiet. Quicumque vero pro tempore erit prepositus, promptissima hominii exhibitione archiepiscopo facta, sicut et alii personatus faciunt, capitulo jurabit fidelitatem, et se mansionarium esse in civitate, et fideliter observaturum quicquid continetur in carta nostra quam penes se habet prescripta remensis ecclesia sigillatam de prepositura, eo excepto quod de Valle Rodigionis ibi continetur, quia eam de cetero nulli preposito licebit reclamare. Hec omnia facta sunt vacante thesauraria. Ut autem ordinatio hec et status iste perpetuam obtineant firmitatem, nos, cum omnibus presbiteris tunc canonicis, excommunicavimus omnes illos qui hunc statum tam sollempniter factum immutarent....

④ 権証書ノ附カタル一八八冊ノ文書。

⑤ Varin. *Arch. admin.*, I, p. 421, n° CCXCIII, Ann. 1192.

Carta de institutione prepositi ecclesie remensis, archiepiscopo a canonicis concessa.

Balduinus prepositus, Radulfus decanus, et Thomas cantor, ceterique remensis ecclesie fratres, omnibus ad quos iste littere pervenerint, salutem in vero saluari. Noverint tam presentes quam futuri, quod venerabilis pater noster Willermus Remorum archiepiscopus, attendens

decembre 1200. Epistola Innocentii pape III ad decanum et canonicos remenses, de vita communi ab ipsis observanda.

特に後者は規律違反に関して厳しい罰則の適用を要求して次の如く云ふ。

「キミンモ誰カ canonicus ガ、〔如何ニ〕輕〔クトモ〕誤チヨオカシタ場合ニハ、 decanus ヲ capitulum ノ前ニ膝ヲ屈シ、士ニ口スケシ、ハリ下ツテ許シヨロウニマラザレハ、許サレタリトミナスベカラズ。」

Varin, *loc. cit.*, p. 436, n. 1. ... Dicitur etiam quod in coercendis et puniendis excessibus tantus rigor servabatur, ut si falso etiam aliquis levitatis aliquis argueretur canonicus, non prius se presumeret excusare, quam flexis coram decano et capitulo genibus, et terra deosculata, veniam humiliter postulasset. ...

「膝ヲ屈シ……」が、Homage 類似の行為たるは注釋。

**LES CATHÉDRALES GOTHIQUES CLASSIQUES
AU XIII^e SIÈCLE ET LEUR FOND SOCIAL
— Les cathédrales de Chartres, de Reims
et d'Amiens —
(Deuxième partie)**

Hiroshi MORI

“La construction d’une cathédrale ne peut se comprendre si l’on ignore le rôle de premier plan accompli le chapitre.” Cette opinion de M. Gimpel exposée dans son ouvrage intitulé “*Les bâtisseurs de cathédrales*” doit être soigneusement retenue en examinant les caractéristiques essentielles de cette communauté des chanoines, le chapitre.

Les règles de Chrodegang, l’évêque de Metz, et d’Aix-la-Chapelle (816), que l’*Indiculum* d’Ebbon adapta au chapitre de Reims, constituèrent pour les chanoines la vie commune dans le cloître et le devoir d’assurer la pratique régulière des messes et des offices divins. Le chapitre était d’abord alimenté par la *mensa canonica*, la partie des biens ecclésiastiques, qui s’est de plus en plus transformée en prébendes individuelles, l’*honor*.

Le chapitre de Reims avait été administré par l’archidiacre, de façon spirituelle, et aussi par le prévôt, de façon temporelle. Le serment (*jusjurandum*), que les archevêques étaient obligés de prêter à leur entrée dans la cité, nous porte à croire que le chapitre est à la fin du XI^e siècle devenu un corps autonome, une puissance rivale de l’archevêque, et que l’autorité presque absolue du prévôt administrant le chapitre était alors établie.

Cependant, cette autorité du prévôt a été remarquablement amoindrie par Guillaume, l’archevêque issu de la famille comtale champenoise, oncle de Philippe-Auguste. L’archevêque a confisqué presque tous les droits et possessions de la prévôté, et ne lui a laissé que le droit nominal, de présider au chapitre. Il a, en même temps, obligé le prévôt, et aussi les autres dignitaires capitulaires, de prêter l’hommage et fidélité à l’archevêque et au chapitre. Le rapport féodal qui impose au chapitre son obéissance stricte vis à vis de l’archevêque a été ainsi établi.

Nous pourrions donc conclure que le chapitre ne pouvait pas jouir, au moins au début du XIII^e siècle, un rôle de premier plan en projetant la construction de la cathédrale, mais que ce fut peut-être lui, qui, dirigé par l’archevêque, a veillé à l’accomplissement de la const-